

ニコラ・プッサン作《ニュサのニンフに預けられる 幼いバッコス、ナルキッソスとエコーの死 (バッコスの 誕生)》—— 物語と空間、文学典拠の境界

神戸大学 福田 恭子

《バッコスの誕生》の通称で知られるニコラ・プッサンの神話画《ニュサのニンフに預けられる幼いバッコス、ナルキッソスとエコーの死》(ケンブリッジ、ハーヴァード大学フォッグ美術館)は、1657年に画家のジャック・ステラのために描かれた作品である。ユピテルより養育を任されたニュサのニンフたちのもとへ幼いバッコスが届けられる場面を表しているが、プッサンはその傍らに消えゆくナルキッソスとエコーを描いた。異なる物語を並置したこの奇妙な図像は、早くはベッローリがプッサンの伝記において注目し、以降多くの研究者の関心を引き付けてきた。このような図像をプッサンが構想した理由として、これまで主に三つの文学典拠が指摘されている。すなわち、オウィディウス『変身物語』、フィロストラトス『イマギネス』、そしてナタリス・コメスの神話注釈書である。かつてはブランとパノフスキーを中心に、いずれがプッサンの典拠となったのか議論が生じ、次第にさらに多くの副次的なテキストが本作品の解釈のために引用されることとなった。しかし、あまりに広範に及ぶテキストの渉猟には批判もなされ、文学典拠の枠組みを定めることが要請されていた。

本発表では、研究史の初期から注目されていた上述の三つの文学作品がいずれもプッサンの創意の礎となったとの立場をとる。ただし目的とするのは消極的な折衷案の提示ではなく、むしろこれらのテキストが積極的に選択された必然性、すなわち画家の関心と、一つのキャンバスにおいて複数のテキストが組み合わせられ、新たな主題表現へと結実するその過程を詳らかにすることである。

これまで議論の対象となっていたのはバッコスとナルキッソスの物語が併せて描かれた理由であったが、本発表が問題とするのは複数の文学典拠を設定するプッサンの制作原理である。1658年に制作された《オリオンとディアナのいる風景》において、プッサンはやはり複数のテキストを活用している。ルキアノスによる古代の絵画の記述と、コメスの神話注釈書を組み合わせることで、古い絵画の図像の復元と、寓意による自然の摂理の表現とを両立させた。この文学典拠の枠組みは、同じくコメスの注釈書と、失われた古代の絵画を記述する『イマギネス』を参照した《バッコスの誕生》にも通じる。また『イマギネス』においては、バッコスとナルキッソスの物語の舞台が同じ場所として語られているが、特定の「場所」の歴史を複数の出来事の表象によって語る手法はプッサンの別作品においても見られる。こうした指摘を通し、本作品における典拠と主題選択の背景には、エクフラシスの伝統に基づく古代の絵画を視覚化することへの画家の挑戦と、ポイオティア地方という特定の土地にまつわる複数の神話を語ることへの関心があったと結論づける。